教団新報

定　価　1部180円（本体164円〒共243円）
予約購読料　1年分　〒共　5,350円
紙代のみ　3,750円
振替 00140－9－145275
本紙を購読ご希望の方は、前金をそえて、お近くのキリスト教書店へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所　日本基督教団
169-0051　東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内　電話03（3202）0546
FAX03（3207）3918
URL http://uccj.org
発行人　秋山　徹
編集主筆　嶋田恵悟
印刷所　株式会社きかんし

メッセージ

主の食卓に集まろう

コリントの信徒への手紙一11章17～26節

藤盛 勇紀

富士見町教会（東京教区）

「集まる」ことによって

今年の元日は日曜日となったため、礼拝に集い、「主の晩餐」聖餐に与って新年をスタートした教会も多かったと思います。この手紙の11章に入ってから、礼拝や集会での混乱の問題、秩序をどう回復するかという話になっているのですが、冒頭でコリントの信徒たちを褒めていたパウロは、この箇所では、「次のことを指示するにあたって、わたしはあなたがたをほめるわけにはいきません」（17）と言います。「あなたがたの集まりが、良い結果よりは、むしろ悪い結果を招いているから」（17）だというのです。ここでパウロが触れる問題は、教会の生命線に触れる深刻な問題です。

教会とは何か。私たちは信仰告白で明快に言い表します。「教会は主キリストの体にして、恵みにより召されたる者の集いなり」。教会とは、神の恵みによって召された者たちの「集まり」です。キリストに結ばれて一つとされた恵みは、私たちが「集まる」ことによって、具体的に現わされ、造り上げられて行きます。ところが、当時のコリント教会では、集まることが「むしろ悪い結果を招いている」という事態に陥っていました。教会破壊的なことが起こっている。なぜそんなことになっているのか。それは、「まず第一に、あなたがたが教会で集まる際、お互いの間に仲間割れがある」（18）のだと。「仲間割れ」や「仲間争い」が教会にあるのは非常に気になることですが、この手紙の初めから、分裂や分派が生じていたことは分かります。それが、「一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにならない」（20）という事態にまで至っていました。「主の晩餐」が「主の晩餐」になっていないという問題です。

「主の晩餐」は、イエスご自身が「わたしの記念としてこのように行いなさい」と命じられた特別な食事です。その食事は、主ご自身がいてくださる食事、主がおられる食卓です。

ところが、「一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにならない」。混乱というより破壊です。それは「食事のとき各自が勝手に自分の分を食べてしまい、空腹の者がいるかと思えば、酔っている者もいるという始末だ」（21）というのです。そんな状態を知ったパウロは、厳しい言葉で叱責します。「あなたがたには、飲んだり食べたりする家がないのですか。それとも、神の教会を見くびり、貧しい人々に恥をかかせようというのですか。わたしはあなたがたに何と言ったらよいのだろう」（22）。「教会を見くびる」というのは、軽んじて侮ることです。「どうせ、ただ人が集まっているだけだろ」「主の晩餐と言っても、ただの食事だろう」と。そのように、集まることを、軽んじることです。

この先の、33～34節の指示から分かりますが、コリントの信徒たちは、集まって食事をするのに「互いに待ち合わせる」ことさえできませんでした。ある人たちが先に食事を始めてしまったり、集まって食事をするにも、分け合うことさえしない。裕福な人たちは、自分の家ですでにリッチな食事を済ませ、当然ワインもたっぷり飲んでいる。教会に集まる時には、すでに酔っ払って、良い気分。かと思えば、奴隷のような貧しい人たちは、その日の仕事をすっかり終えてからでないと、集まりに参加することができません。ようやく教会に集まってみると、すでに食事も聖餐も終わっている。そのように、貧しい人々が辱められている。

今ではちょっと考えられないような有り様ですが、こんなことで「主の晩餐」、「イエスの食卓」が成り立つはずがありません。「主の晩餐」は、ただの食事ではなく、「主の」食事です。その食卓には主ご自身が臨席しておられます。だから教会では、この文字通りの「食卓」が、礼拝堂の真ん中に置かれるのです（時代によって、前方の壁に祭壇として置かれたり、説教卓と会衆席の間に置かれたり、文字通り中心に置かれたりします）。

主の恵みを味わい知る

コリント教会の混乱ぶりですが、聖餐の破壊にまで及んでいたとは、少々衝撃的で、「これでも教会か」と思わされます。しかし、教会という集まりは、決して聖人君子や聖く正しい人の集まりではありません。「義人なし、一人だになし」（ローマ3・10）。教会は常にあらゆる人を招いています。当然、常に問題や悩みを抱えています。パウロも第二の手紙で、自分が経験した想像を絶する患難について告白した後で、言うのです。「このほかにもまだあるが、その上に、日々わたしに迫るやっかい事、あらゆる教会についての心配事があります」（11・28）。パウロを悩ましたのは、命が脅かされるような患難より、むしろ「日々わたしに迫るやっかい事、あらゆる教会についての心配事」でした。さらには、パウロ自身の肉体的・精神的苦痛が追い打ちをかけていました。そんな日々で、彼は何を味わい、知ったのかというと、主ご自身が自分に語ってくださるお言葉なのです。主はパウロに親しく語りました。「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」（12・9）。だからパウロは言ったのです。「キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです」（12・9～10）。

私たちが知る主の恵みは、具体的です。主の恵みは、何か新しい考え方だとか、気の持ちようのようなことではなく、自らの体をもって味わい知るものです。自分の肉体や心の弱さにもかかわらず、時には「行き詰まりの状態にあっても」、満ち足りて生きられる恵みです。「わたしは弱いときにこそ強い」と言い切れる強さです。主の恵みは、力を発揮するからです。

そこで、単純、率直にお勧めしたいのです。主は語っておられるのですから、日々主の御言葉に聞きましょう。そして、集まりましょう。この私たちの体をもって、主の恵みを味わいましょう。もちろん、感染症の危険がありますから、集まることは相変わらず難しいのです。しかし、ただ引き籠もって健康を保つとして、そこでいったい何を守るのか、考えたいと思うのです。

パンデミックが始まった頃、「礼拝に来てください」とは言えないので、教職と一部の長老に限定して礼拝を献げました。礼拝は中止すべきだという意見もありました。人命の方が大切ではないかと。それはそのとおりです。しかし、なぜ限定しても礼拝を続け、リスクを冒して集まったのか。それは、最も大切なことは何か、私たちに最も必要なことは何かを、示すためでもありました。

実際に主の食卓の周りに集まる礼拝は、教会共同体にとって何より大切なことです。ここで主の御声を共に聞いて、共に主の恵みを体で味わい、遣わされる。それ以上に大切で価値あることが他にあるでしょうか。

コロナ禍に対応する生活は、4年目に入りました。また、人それぞれ様々な事情も抱えています。それでも、基本的には集まりましょう。「主のもとに、主の食卓に集まろう」と、呼びかけ続けます。私たちは、ここに臨んでくださる主の民、主のものだからです。

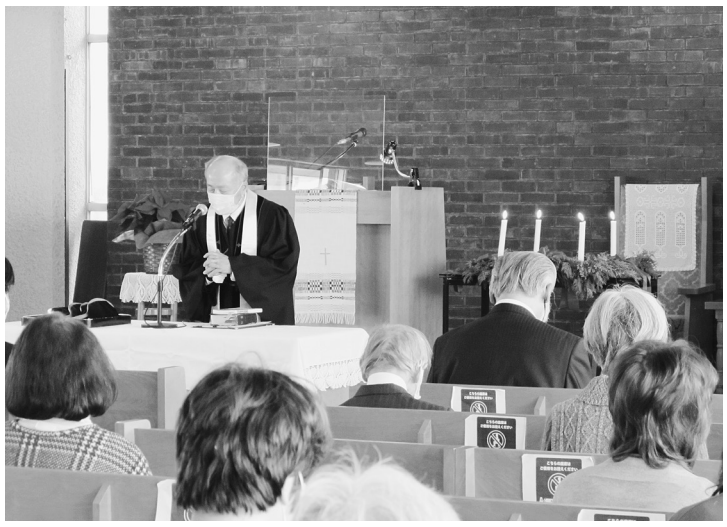
（富士見町教会牧師）

新型コロナウイルス
感染拡大の渦中で

コロナ3年目のクリスマス

旭川六条教会《北海道》

光は暗闇の中で輝く



上、クリスマス礼拝
下、ピアノによる特別賛美

旭川六条教会は、2022年度のクリスマスの燭火讃美礼拝（イブ礼拝）とクリスマス礼拝を感謝の内にささげることができました。特にイブ礼拝は、新型コロナウイルス感染症のため2年間中止せざるを得ませんでしたので、感慨深いものがありました。

12月24日午後7時から燭火讃美礼拝をささげました。内容は礼拝、特別讃美、ハレルヤコーラスの3部で構成し、プロジェクターで聖書の場面等をスクリーンに映し出しました。教会員有志による聖歌隊の合唱、チェロとピアノの演奏（特別讃美）がありました。ろうそくの光が暗い会堂を照らす中、一同で讃美歌を歌って平和を祈りました。牧師が「光は闇の中で輝く」との説教を語り、その中でロシアによるウクライナ侵攻について言及しました。「第一次世界大戦中の1914年、ドイツ軍と英国軍が休戦した。世界の人に平和が訪れますように」と祈りをささげました。

25日のクリスマスは、牧師が「呼びかける声がある」との説教を語り、礼拝をささげました。礼拝に引き続いて、教会員のピアノによる特別讃美がありました。礼拝後の退席時に、クリスマス・プレゼントを出席者に配りました。感染症に配慮して慣例の愛餐会等は中止しました。なお、どちらの礼拝も動画としてユーチューブ配信されています。

昨年2022年は、六条教会の信徒だった小説家三浦綾子さんの生誕100の年でした。六条教会では、三浦光世・綾子ご夫妻をしのぶ「懇談会」を7月から毎月計6回開催しました。教会員がご夫妻の思い出を語り、教会の121年の歩みの中に位置づけ、分かち合いました。お二人の思い出を共通の宝とすることができました。教会外でも、三浦綾子さんについての様々な企画・イベントが実施されました。そのせいか、クリスマスの礼拝には一般市民の出席もありました。

（後藤正敏報）

市民クリスマスin千葉2022《千葉県》

教派を超えてクリスマスを祝う

2022年12月10日に多くの方の祈りとお力添えに励まされ、また主の導きと御守りの内に、市民クリスマスin千葉2022を、千葉市民会館・大ホールを会場に開催することができましたことを感謝しています。コロナ感染症が心配されましたが、約200名の方が参加しました。

この市民クリスマスin千葉は、千葉市内の超教派牧師会を母体とした取り組みです。教派が違えども唯一なるイエス・キリストを信仰し、共にクリスマスを喜び祝う時を過ごしたいという祈りから始められました。この集いは単に主のご降誕をお祝いする場を共に準備し礼拝するだけでなく、教派を超えた良き交わりにもなっています。

そのような背景を持つコンサートに、今回はゲストとして、シンガーソングライターでもある、日本基督教団東美教会の陣内大蔵牧師をお招きすることができました。これまでは礼拝とコンサートの二部構成でしたが、メッセージもコンサートも陣内牧師にしてもらうことから、それらを組み合わせた新しいスタイルに挑戦しました。

陣内牧師が自らコンサートのテーマを、「そして僕は今日も歌おう」と定め、自身の証しを中心にクリスマスのメッセージを語りました。牧師家庭に生まれたという生い立ちから、クリスマスの思い出も紹介しつつ、私たちがどのようにクリスマスを過ごせば良いのかを、マリアの賛歌を用いて力強く説き明かしました。

コンサートでは定番の讃美歌やクリスマスソングに加えて、歌手としてご自身が手掛けた楽曲も披露し、大盛況でした。

私たちの内にだけでなく、主の栄光にまだ照らされていない人と場所に、クリスマスの喜びが豊かにありますように。

（菊地信行報）

「そして僕は今日も歌おう」をテーマに

旭東教会《岡山》

密になっても大丈夫

コロナ対策が厳しく言われるようになった2021年の8月から、旭東教会では、あることを切っ掛けにして「密な信仰生活」を送るようになり始めました。旭東教会の礼拝には2度の報告の時間があります。礼拝の前半部分と、祝祷後の時間帯です。その最後の報告の時間で「1分間の分かち合い」という名の時を過ごすようになったのです。「密」を礼拝の時間に持つなんて今の時代に逆行しているように見えます。しかし、窓を開ければ換気が確実にできる会堂です。20分毎に5分間の窓開けを徹底し、「1分間の分かち合い」を毎週行っています。

一週間に起こった喜怒哀楽、お祈りしてほしいこと、分かち合いたいささやかな喜び、失敗談などが、手を上げた人の持つマイクを通じて拡散して行きます。マイクは聴力に弱さを覚える方への配慮であり、同時にマスクをしていても聞きやすいという利点があります。二人、三人での会話の内容を教会全体に広げるのは難しいものです。でも、礼拝出席している一人ひとりが耳を傾ける時間帯に皆が同時に聴くことができれば、私たちは心の架け橋となる情報を共有できるのです。

教会という場所は個人的に親しくお話をしたことのない方が居られるものです。その関係性を思いがけない形で変えられる時間となりました。今では手が次々に上がる日も少なくありません。週報にお名前を記し、抄録としてその中身を掲載する努力も続けています。お休みの方も後日読むことができます。

クリスマス愛餐会では、黙食していても互いの心の距離が以前にも増して近くなっていると感じたのは、私の気のせいではないと思ったのです。教会は一体感に満ち、笑顔があふれました。「1分間の分かち合い」の力だと信じています。

（森言一郎報）

クリスマス礼拝

クリスマス祝会

長崎飽之浦教会《長崎県》

〝小さな群れ〟の強さを感じながら

新型コロナの流行が始まって4年目に突入しました。2020年当初、わたしが抱いていた感想は、①このままズルズルと感染拡大に歯止めがかからず「北斗の拳」の描く世紀末世界に突入する。②何とかこの危機を乗り越えて、「ドラえもん」の描くバラ色の未来に進む。の二通りの未来でした。

子どもたちの居場所として

①の場合、「〝善良な牧師〟なんてのは真っ先に死んでしまうのでいやだなぁ」、とか思っていました（自分で〝善良な〟とか言ってる時点で結構図太く、したたかに生き残っていきそうですが…）。北斗の拳の世界では、大概生き残っている宗教者というのは胡散臭い新興宗教の教祖くらいで、他者の犠牲の上に「自分さえ良ければそれでいい」的な人物が描かれることが多いように思います。

一方、②の場合はオンライン会議の普及により、移動せずに遠くの人と繋がることができる状況は、まさに〝ドラえもんの未来〟であり、「そういや22世紀の世界でセワシ君が学校行ってるトコとか見たことないなぁ。それって授業は全部リモートだからかなぁ」とか妙に納得してしまう部分がありました。

そんなことをあれこれ考えながらも、私の牧する教会は（代務する教会も含めて）礼拝出席者が少ないことも幸いし、この3年間一度も休まず礼拝を続けることができています。〝小さな群れ〟であることの強さをこれほど感じたことはありません。

また、感染がピークに達する状況でも、教会にはたくさんの子どもたちが遊びに来ています。おそらく外で遊んでいると、近所のおとなに咎められるといった事情もあるのでしょう。こちらが「そんなに近づいて大丈夫か?」とヒヤヒヤするくらい、教会の中では普段通りの子どもたちの姿が見られました。そうやって教会が子どもの居場所として認知されているのだとすれば、私たちが「この地で踏ん張る」意味も与えられると思っています。

まだまだこの先の未来がどうなっていくのか、見出せない部分もたくさんありますが、この地で神様と共に歩んでいきたいと願っています。

（大薮朝祥報）

教区議長コラム

◆ 西東京教区 ◆

岩田　昌路

西東京教区は1999年4月に旧東京教区西支区が独立して設立された新しい教区です。教区が近くなり総会や諸集会を主日の午後に開催できる利点も生まれました。設立当初より「積極的に福音伝道を行う教区」、「諸教会が互助に努め、連帯する教区」、「社会の課題に取り組み、地域に奉仕する教区」が教区形成の三つの柱とされています。

伝道・連帯・奉仕を柱に

戦後、東京教区の諸教会が西へと開拓伝道して設立された諸教会が多くあり、親教会群による開拓伝道で設立された諸教会があります。そして「教会を生み出す」という教区設立の理念により、教区による開拓伝道が志向され、再開発計画地・アジア最大の大学密集地の立川で展開することへ導かれ、2013年に立川からしだね伝道所が開所されました。やがて土地建物が購入され、現在は借入金完済の目途も立ち、新たな段階に進む時期を迎えています。

一方、現代社会に立つ諸教会・伝道所は、コロナ対応をはじめ、さまざまな困難を抱えて苦境の中にあります。教区が互助と連帯に力を入れて共に歩み続ける時であることを自覚させられています。

SCF（学生キリスト教友愛会）との共働は、青年活動を中心に救援対策、他教区との交流、伝道構想等、多方面の意味と可能性をもっています。将来伝道構想のために共同プロジェクトチームが設置されましたが、思いがけず、コロナ対応として諸教会・伝道所のインターネット環境整備の応援や青年派遣が最初の奉仕となりました。

西東京教区は、教団信仰告白と教憲教規に現われる教会のかたち、洗礼から聖餐への聖礼典の理解と執行を重んじます。私たちはその信仰の一致の基盤のもとに多様な賜物が生かされる地域的共同体の形成に励みたいと願います。

（西東京教区議長）

2・11メッセージ

2・11に思う
～“自由”こそ人権そのものです～

私にとって長らく、2月11日は「両親の結婚記念日」でした。子どもの頃より「紀元節」に結婚したのだと、何度も両親から聞かされてきたためです。生きていれば今年で100歳を迎えていたはずの母は、2代目のキリスト者として、それは熱心に聖書に基づく子育てに徹した人でした。しかし、母の口からは、なんの抵抗もなく「紀元節」の言葉が発せられていたのです。日本神話を基として定められた「紀元節」は、1948年に廃止されますが、1966年、同じ日が「建国をしのび　国を愛する心を養う」ことを目的とする「建国記念日」として制定されました。教団では、この日を「信教の自由を守る日」としています。

個人の思想や信仰に対する国の動きを振り返ると、1939年、第二次世界大戦の前夜、宗教団体を国家の統制化に置くことを目的とした宗教団体法が公布され、信教の自由は大きく制限されました。1945年、宗教団体法の廃止、宗教法人令の公布により、神社を含めた宗教団体が法人格を取得することとなり、1948年、信教の自由、政教分離を明確に定める日本国憲法が施行されたことを受けて、1951年、宗教法人法が制定・施行されました。この変換は「信教の自由」を謳うことの法による表明なのだと私なりに解釈していました。

しかし、昨今、様々な場面で、自由が脅かされていると思えてなりません。政治の領域では2022年12月、日本の安全保障及び防衛政策「戦略3文書」を用いた大幅な防衛費の増額と、それを巡る増税計画が進められています。社会では、コロナウイルスへの対応がなされる中、「同調圧力」も手伝い、個人の自由な行動が過度に制限されている側面があることも否めません。「何かがおかしい」と感じさせられる事態が展開していて、国家的思想統制を受けた時代と変わらない社会の再来を恐れています。個々人の意思による選択の幅を狭め、情報操作を駆使し続ける圧力には、どんな時代であっても断固として異議を唱え続けます。

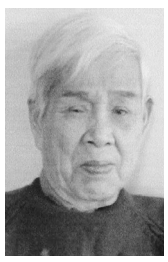
「信教の自由」は憲法によって保障されている大切な権利であり、神に造られた人間が、神の呼びかけに応え、隣人と互いの人格を尊重し合うことで、人間の尊厳を保っていく上で欠かせないものです。私たち一人ひとりが、信教の自由を守り、自己を決定し行動を選択するという自由を行使することこそが、まさに基本的人権そのものなのだということを、2・11を前に、改めて受け止めたいと思います。全国で開催される2・11集会と共に、主にある自由を強く祈り求めます。

2023年2月11日
第42総会期日本基督教団
社会委員　金子直子

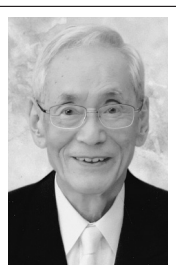
事務局報

大久保教道（隠退教師）
22年1月18日逝去、94歳。東京都生まれ。88年受允、94年受按。88年より小金、長生教会を牧会し、04年隠退。遺族は息・大久保教宏さん。

大串　肇（仙川教会主任担任教師）
23年1月8日逝去、65歳。東京都生まれ。85年東京神学大学大学院修了。同年より東中通、仙川教会を牧会。遺族は妻・大串浩子さん。



風間直次郎（隠退教師）
23年1月12日逝去、82歳。東京都生まれ。71年日本聖書神学校卒業、72年より赤磐、小石川白山、七里教会を牧会し、14年隠退。遺族は妻・風間トモ子さん。



平居　譲（隠退教師）
23年1月14日逝去、90歳。京都府生まれ。58年同志社大学大学院修了、同年より五泉、津川、原市、王子教会を牧会し、教団事務局幹事を務め、97年隠退。遺族は子・平居進・いずみさん。

徳永五郎（隠退教師）
23年1月16日逝去、92歳。山口県生まれ。58年東京神学大学大学院修了、同年より鳴海、城西、相知教会を牧会し、08年隠退。遺族は姉・石黒妙さん。

教師異動
八王子栄光
〃　辞(代)本多峰子
　　就(主)本多峰子
美祢　辞(代)菊田行佳
〃　就(兼主)渡辺健一
糸満　就(担)柳　宗佑
東梅田　就(担)鄭　詩温
広島福島町
　　就(代)松木田博
小月　辞(代)清田勝成
〃　就(代)小畑太作

教師隠退
久保良行、上林順一郎

教会所在地変更
置戸
〒099－1100　北海道常呂郡置戸町置戸14－7

教師改姓
米田満瑠→和田満瑠

お詫び・訂正
新報4990号3面「《第42総会期》常設委員会等委員選考結果」欄、《年金局理事》近藤康夫氏の所属教会名「土佐」を「新居浜西部」に、《隠退教師を支える運動》鈴木秀信氏を招集者に、お詫びして訂正いたします。

伝道報告

伝道のともしび

TOMOSHIBI

七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。…イエスは言われた。「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」
ルカによる福音書第10章17節～20節

キリストの妥協なき眼差しに導かれ

石動教会牧師・幼保連携型認定こども園石動青葉保育園園長　井幡　清志

富山県下でも人口減少著しい小矢部市。公立園は統合、他の私立園も定員を下げ始めた中で当園は数億円を借りて新園舎を建築。地域の子育て世代に「園児の生き生きした姿」が少しずつ伝わり165名の園児と充実した日常を送っています。「うまくいっている」ということでなく、託された務めを見極め、自分たちの働きを磨き、共に担う保育者の人生を大切にして、小さなこと一つ一つに立ち止まってきた今の姿です。

カナダ人キリスト者による明治期の創立ですが、今日の保育の難しさは当時の比でなく子育ての孤立化、地域子ども社会の衰退、夜型生活の低年齢化、ゲームや動画サイトの影響など厳しい状況が山盛り。その中で命を深く捉え、生きる幸いを心の奥にまで伝え、『子供の育ちを救う』ことは保育に与えられた務めです。そこで真に子どもを主体とする保育を求め、保育者が深く自分を見つめながら自信と誇りを持って子どもの傍に立てる者となるとの思いを共有して歩んできました。「幼子のように」と人々の目を子どもの姿に向けた主イエスのお考えによる実践を、正攻法でやれる保育者集団を作ることが力になると実感しています。

今、働いている職員40名の半分近くが保護者出身。子どもに向かう保育者の姿勢に共感し園を守る一員となってくれました。職員から礼拝に繋がる者も少なからず、今は23名が石動教会員です。勤めて初めて聖書を読んだ人が大部分、そこから信仰へと導かれる道筋は実に様々ですが一つ言えるのは、使命である保育を探求する営みそのものが大切だということ。神は保育を通して命の可能性・かけがえのなさに向き合う課題を与え、保育者自身の人間性を保育の中で深く問われます。御言葉がその課題や問いへの導きとなり、力を与え、慰めを与える…それらが合わさって今に繋がっていると見ています。

信仰が職員の関係も深く真摯にします。問題があれば共に立ち止まり、大人の事情でなく子どもにとっての最善を真っ直ぐ求め、互いの保育を率直に語り合える…なぜそうできるか。同じ御言葉の響く中に身を置いていることが大きいと職員たちは実感し自覚しており、これは教会にまだ繋がっていない職員への証です。保育のあり方も含め石動で起こっていることは、キリスト教園や教会に一つの可能性を示す実践ともなっていると思いますが、どうでしょう。

2021年秋に完成した新園舎は、園での豊かな日常を保障するため保育環境に関わる既成概念を打破し、幾つもの挑戦を含んだものです。これは子どもたちの最善をブレずに求め、自分たちが変わることを厭わない保育者たちがいるからこそ実現できたこと。保育者による虐待のあった園があり、十字架を頂く園舎の映像が全国に流れました。園舎を建てて人を雇えば保育ができるのか、キリスト教団体がやればキリスト教保育になるのか。大事な課題です。私たちは、キリストの妥協なき眼差しに導かれた豊かな保育の内実をこそ希求したいのです。

上、新園舎の庭側からの全景
左、庭から見た教会の外観

▼年金局理事会▼

3年ぶりに集って開催

第1回年金局理事会が、1月20日キリスト教会館会議室（一部オンライン参加）で開催され、教区代表理事、監事、総幹事、東京教区支区代表、隠退教師を支える運動推進委員長ら総勢27名が3年ぶりに集った。

今総会期には北海、奥羽、東京、神奈川、中部、九州、常議員会推薦の7名の理事と監事1名の交代があった。まず、招集者中川義幸理事が年金局理事長に推薦され、満場一致で承認された。また金刺英雄（関東）、渡邊義彦（東京）、籔田安晴（常議員会）、髙花富夫（常議員会）各理事が常任理事に推薦され、理事長、秋山徹総幹事と6名で常任理事会を構成することが提案、承認された。

この3年間コロナ禍の中で、教区総会を始め、各集会等の開催が難しく、また実施されてもオンライン開催や規模の縮小により、年金局からの報告やアピールがままならないこと、そのような状況での知恵や工夫などの報告が教区代表理事から伝えられた。

未加入教師への教団年金加入への働きかけと年金制度を支える謝恩日献金への参加教会拡大の呼びかけが課題である。そのことに向けて、徐々に再開される教区総会や教師オリエンテーション、信徒の集会の場に併せて、各教会に向けて個別の声かけなどを、教区代表理事が中心となり、要請に応じて理事長等も出向いてアピールしていくことを確認した。

献金と共に制度の支えとなる資産運用は、引き続きコロナ禍やウクライナ侵攻などの影響により厳しい状況ではあるが、年度の目標は達成できる見通しである。年金制度の面では、2年に亘って制度設計の見直しについての検討を重ね、試案がまとまりつつあること、2017年以来の第7回財政検証が現在行われており次回理事会ではその結果を説明する予定であることが報告された。

なお、昨年、一昨年に比して芳しくない謝恩日献金状況について、年度末までの2ヶ月半、まだ献げられていない教会を中心に呼びかけに努めることを確認して、半日の理事会を終えた。

（村山めぐみ報）

人ひとときひと

ケイトリン・オークインさん

愛がなければ

シカゴで育ち、幼い頃から長老派の教会に通っていたケイトリン・オークインさんが、自覚的に信仰を受け止めたのは中学生の時。人生が神の御手の中にあり、良いことも悪いことも、全てを益としてくださることを知らされた。

ブレザレンの大学で宗教学と政治学を学び、卒業時に教会の海外宣教に信徒を派遣する部署を訪ねたところ、アジア学院で2年間働くプログラムを紹介された。2018年に赴任、支援金を集める部署で働きながら、学生たちと生活を共にした。

任期を終えた2020年はコロナウイルスが猛威を振るっている時期で、「帰国しても仕事は見つからない」と考え、日本に留まることを決意、金城学院中学校で英語教師の職を与えられた。週16コマの授業の他、行事の準備、部活の顧問、礼拝のメッセージなど、多岐にわたる働きを担っている。

生徒の中には、恥ずかしがりやで、勉強は出来るのに英語を話そうとしない子もいる。自信を持って話せるようにするのが自らの役割だと受け止める。フレンドリーな性格を活かし、「先生と話したいな」と思ってもらうよう心掛けているという。

宣教については、外国人という異質な者として歩んでいることが、福音を伝えやすい立場にあると捉えている。愛唱聖句は、「たとえ、人々の異言を、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら…」（コリント一13・1）。主イエスの愛に生かされることが生む独特さが、人々に「どうしてこの人は他の人と違うのだろう」という思いを抱かせることになる。愛によって伝えられたことこそが、人々の中で永続すると考えている。

コロナウイルスという試練の中で、日本で福音を証する道が開かれたことも、全てを益としてくださる神の導きと受け止めているという。

中京教会に出席

伝道のネットワークの充実を願って

教区議長の働きを担う中での大きな感謝は、四国のそれぞれの場で歩む信徒の方々の、信仰の歩みから出てくる言葉に出会わせていただけることである。

かなり以前になるが、南予分区のある教会の役員の方々と、懇談する時があった。一人の方が、こう言われた。もし、この教会がなくなったとしても、今なら車で約20キロ先の隣の教会の礼拝に出席はできる。しかし、高齢となり車の運転が出来なくなれば、遠距離通うことは難しくなる。そして、最後にこう言われた。「高齢化が進んでいる四国だからこそ、四国にはもっと教会が必要ではないかと思います」と。私は、本当にその通りだと思わされた。高齢化が進むからこそ、礼拝出席が可能な範囲に教会があることはどんなに大きな意味があるのだろうかと、考えさせられた。

四国教区は、それぞれの教会を伝道の拠点と受け止め、この伝道のネットワークを大切にしてきた。そして、高齢化が進むからこそ、更にきめ細やかなものにしていく必要があるのではないかと、思わされている。

体が真に生きるために隅々まで毛細血管が伸びているように、日本の隅々にまで伝道のネットワークが広がっている。そうして、日本のどこでも礼拝を捧げ信仰の道を歩むことが出来る。そんな教団の将来を、祈り求めていきたいと願わされている。

（教団総会書記　黒田若雄）